



教育文化活動が JAリーダーをつくる (上)

ゲスト/三津山 定 (静岡県JA静岡市 代表理事組合長)

第35回ゲスト

静岡県 JA静岡市 代表理事組合長
三津山 定



みつやま・さだむ

1960年静岡県生まれ。1983年静岡市農業協同組合に入組。静岡市内5農協が1992年合併後、あさはた支店開発次長、長田支店次長、金融業務課長、広報課長、企画部長などを歴任。2020年代表理事専務を経て、2023年に代表理事組合長に就任。静岡県農業協同組合中央会副会長も務める。

●インタビューとまとめ

三重大学名誉教授
京都大学学術情報メディアセンター研究員
石田正昭



いしだ・まさあき

1948年生まれ。東京大学大学院農学系研究科博士課程満期退学。農学博士。専門は地域農業論、協同組合論。元・日本協同組合学会会長。三重大学、龍谷大学の教授を経て、現職。近刊書に『JA女性組織の未来 躍動へのグランドデザイン』『いのち・地域を未来につなぐ これからの協同組合間連携』(ともに編著、家の光協会刊)。

JA静岡市(静岡市農業協同組合)

1992年9月に静岡市内5農協(安倍、静岡市、静岡市長田、城北、静岡市千代田)が合併して発足。2022年に合併30周年を迎えた。市内葵区と駿河区を管内とし、本店をはじめ、支店、営農経済センター、ローンセンター、茶業センターなどの店舗がある。2023年度から2か年計画として「組合員とともに創造“農業と協同の未来”」を掲げる。



●組織の概況

組合員数：26,988(正組合員：8,827、准組合員：18,161)

役員数：29(常勤・非常勤含む)

職員数：498(臨時職員含む)

設立：1992年9月

本店所在地：静岡県静岡市駿河区
曲金5丁目4番70号

出資金：17億9,605万円

貯金：3,903億円

貸出金：1,326億円

長期共済保有高：8,472億円

購買品供給・取扱高：21億円

販売品販売・取扱高：39億円

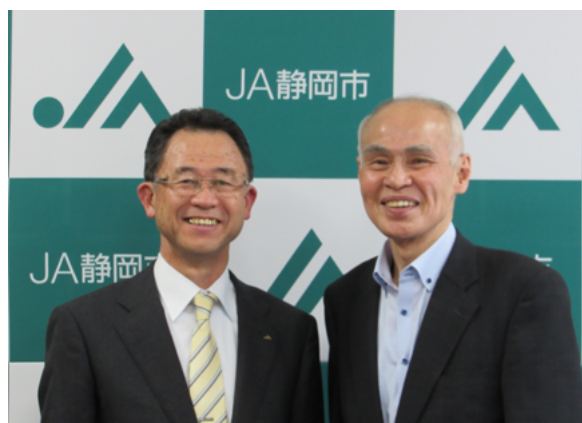
(2022年度実績)

●地域と農業の概況

南は気候温暖な駿河湾沿岸から、北は3000m級の山々がそびえる南アルプスまで南北に約84kmある地域。その大部分が山間地で平坦地はわずか7%。地域の条件を生かして、海岸地域ではイチゴ、葉ショウガ、野菜、モモなどの施設園芸が盛んであり、山間部ではお茶を中心にミカン、ワサビ、シイタケなどの特色ある農業生産が行われている。

教育文化活動がJAリーダーをつくる

JA静岡市は伝統的に教育文化活動に力を入れている。それが2回の家の光文化賞受賞につながった。女性部活動が活発に行われるとともに、組合員教育の充実のため、組合員教育基金積立金を造成し、組合員教育対策委員会を設置している。今回はその課題も含めて、他の模範となるような取り組みを三津山組合長に語ってもらった。



■ わがJAの伝統 教育文化活動への注力

石田：JA静岡市は2012(平成24)年度に第63回家の光文化賞を受賞しました。そのとき現地調査をした審査委員はわたしでしたが、その後も教育文化活動に注力している姿が資料から読み取れます。

三津山：わがJAの場合、教育文化活動への注力は伝統的なものです。50年以上前の1972(昭和47)年度に旧静岡市農協が第23回家の光文化賞を受賞しました。また、1992(平成4)年9月に現在のJA静岡市が発足しましたが、初代組合長で静岡県農協中央会会長、家の光協会会長を歴任した鈴木脩造さんが、教育文化活動を柱としたJA運動を推進してきました。

なかでも女性部の活躍はめざましいものがあります。2023(令和5)年に全ページカラー刷りの『30周年記念誌』を刊行しましたが、そこに女性部の歩みが詳しく記載されています。それによれば、女性部設立の初年度(1993年度)からふれあい朝市(Aコープ高松店前)、フレッシュミセススクール開催(全6回)、理事会で参与制度導入(部長・副部長出席)のほか、婦人大学ではハワイで日米親善交流会を開いています。

さらにまた、2002(平成14)年6月には女性部(女性部長：海野フミ子さん)が、退任する鈴木脩造さんに掛け合って「女性総代105名誕生」を実現させました。これって全国のJA女性参画の先べんをつけたものと自負しています。

石田：海野フミ子さんにはわたしも大変お世話になりました。彼女が代表を務める「アグリロード美和」を取材させていただき、その活動内容を盛り込んだ拙著『農協は地域に何ができるか』を2012(平成24)年に農文協から出版し、2013年度「JA研究賞」の受賞につなげました。

三津山：アグリロード美和は1996(平成8)年に、女性部美和支部(支部長：海野フミ子さん)がJAの軒先で朝市をスタートさせたことに始まりますが、現在も年間1億円近くの売上げを誇る直売所(加工所併設)です。鈴木脩造さんも美和の出身で、旧美和農協の組合長を務めたことから、よき理解者を得て実現したものです。

それだけではありません。当時の望月正己美和支所長も立派でした。海野フミ子さんら支部役員の要望を聞いてもJAはすぐには動きませんでした。「Aコープ美和店はこれまでJA主導で運営してきたが、これからは女性部員の声や要望を大切にしたいので、女性部員を中心とした自主運営を基本に再構築を検討することにしましょう」と回答したそうです。その後、地区代表者と職員合同の「女性部組織再編プロジェクトチーム」を立ち上げ、アンケート調査を行い、その結果に基づいて直売所の開設を決定したとのことでした。

重要なことは、これを契機に組合員や女性部員の要望を聞いて、それに基づいたJA運営を進める手法を確立したことです。

たとえば、女性部の機構図からも分かるように、現在の女性部は6ブロック(各ブロックには統括部長を配置し統括店舗がある)に分かれています。

うちの長田(おさだ)ブロックにはその下の「地区」がありません。その理由は小さな地区で動くよりも、大きなブロックで動くほうが動きやすいという女性部の意向を尊重したことにあります。

それだけではありません。ブロックとは別に、JA全体で目的別グループを立ち上げ、「営農グループ」「助けあいグループ」「購買利用研究



「アグリロード美和」代表の海野フミ子さん(左)は直売所と加工施設を開き、女性農業者が活躍する場をつくっている



女性部が運営する「アグリロード美和」。年商は1億円近くになる

委員会」「フレッシュミズ」を組織化しています。これは地区ではなく活動目的に焦点をあてた仲間づくりを進めたいという女性部の意向に基づくものです。将来的には、長田ブロックのようにブロックから地区が消えて、目的別グループが女性部の主流となるかもしれません。

■ 数ではない、志を重視した「女性部活動」

石田：そうなることを期待しています。というのは『30周年記念誌』を拝見すると、2022(令和4)年度の女性部員は1,200人ですが、女性部発足時の1993(平成5)年度には3,500人もいました。この30年間でおよそ3分の1に減っています。しかもその減り方は近年激しくなっています。

三津山：初期のころは完璧とはいわないまでも、各ブロックには中心的なメンバーがいて、その人たちがリーダーシップをとっていました。しかし、そういう第一世代のリーダーたちも高齢化し、引退する人が増えてきました。かといって若い人たちが入ってくるわけでもありません。役をやりたくないという人も出てきて、部員が減少しています。

わたし自身、女性部総会に出席し、その後の懇親会にも参加して、皆さんからお話を聞いていますが、目的別グループは大勢の人が集まるというのではなく、最初に2、3人で始めたところに、1人、2人と入ってくるのが実情のようです。これってとても重要なことだと思います。たとえ数は少なくても、少しずつ同志が増える。とてもいいことだと思います。

石田：わたしもそう思います。重要なことは数ではない、志です。志を同じくする人たち、それも「食と農」というJAの存在意義につながるような活動に関心のある人たちが集まることが重要です。いうならば数から質への転換を図る時代になっているのかもしれません。

三津山：お楽しみがあってもいいと思いますが、相互に研究したり、討論したり、実行したりなど、JAを「学びの組織」とするような活動に自発的に人が集まってくることを期待しています。押し付けがましくなっていたというのがJAの悪い癖で、その点は改めなければならないと考えています。

2022(令和4)年度の目的別グループの活動をご紹介しますと、営農グループでは、31グループが、朝市グループ、加工グループとして活動しています。ふれあい朝市(軽トラ市)の開催、じまんの食フェスタでのスイーツ販売、「お茶の淹れ方」「茶摘み」「農業体験」などを通しての食農教育活動の展開、藁科学校給食センター、門屋学校給食センターへの農産物納入のほか、静岡市の産業フェアやその他の地域イベントに積極的に出店しています。

購買利用研究委員会では、21人の女性総代(女性部員)が正月商品や購買取扱商品を研究し、10月の生活事業大感謝祭では、女性部カルチャー教室の作品展

示を実施しました。

助けあいグループでは、5グループ43人が活動しています。地区でミニデイサービスを開いたり、施設訪問でフラダンスを披露したり、厚生病院からの依頼で枕カバー、車いす安全カバー、ドレーン用ポシェットなどを製作・寄贈したりしています。また、特別養護老人ホームなどにウエス(タオルなど)や新聞紙のごみ箱の寄贈なども行っています。



フレッシュミズでは、JAみっかび女性部フレッシュミズ「みかんちゃん」との交流会、ブドウ狩り、ソーセージ作り体験、バルーンバレーボール大会、寄せ植え体験、自力整体講座などを楽しみました。

石田：素晴らしいですね。量から質への転換が確実に進んでいることが感じられます。

三津山：そうですね。女性部全体としても4年ぶりに「女性部ふれあい文化祭・家の光大会」を開催し、約380人の参加を得ました。

■ 教育基金積立金の造成と教育対策委員会の設置

石田：2007(平成19)年度から組合員教育基金積立金の造成を開始し、2008(平成20)年度には組合員教育対策委員会を設置しました。

三津山：女性部、青壮年部へのJA助成は営農事業予算から支出しています。

それとは別に、組合員教育を計画的に行うために組合員教育基金積立金と組合員教育対策委員会を設けました。その成果が高く評価されて、2012(平成24)年度家の光文化賞の受賞につながりました。委員会発足から現在に至るまで、榎本秀一さん、青山吉和さん、大原正和さんの歴代組合長、そしてわたしというように、よき伝統が受け継がれています。

石田：組合員教育の計画化というか、教育文化活動の継続と発展には、そのような制度を設けることが重要だと思います。

三津山：そのとおりです。組合員教育基金積立金は、毎年度当期剰余金の20%以内で10億円を目標に積み立てており、2022(令和4)年度末現在、7億5,400万円に到達しました。毎年度の教育文化活動予算額は同積立金の運用益を活用することとしており、2023(令和5)年度の場合、前年度の運用利回りである0.667%に相当する503万円を計上しています。

石田：計画的ですね。その予算額はどのように振り向けていますか。

三津山：教育文化活動の予算は、①集落・支店を範囲とした活動(1支店1協同活動)、②組織リーダー・総代を対象とした活動(組合員講座)、③次世代を対象

とした活動(青壮年部研修会、女性大学運営費、准組合員対象の食農体験、准組合員広報誌の発行)に使われています。毎年度、組合員教育対策委員会で予算配分を決め、予算の範囲内で、適正に使うようにしています。組合員教育対策委員会の設置目的は、わたしの代になって思い切って明快にし、「組合員教育事業を効果的に推し進めること」としました。委員会の構成員は、ブロック運営委員長6名、青壮年部代表2名、女性部代表2名、理事(総務・経済担当常勤役員)2名、中央会・家の光協会3名です。

石田：それとは別の枠組みになるかと思いますが、ほかのJAでは農家組合や実行組合と呼ばれている部農会組織の活性化支援も行っていますね。

三津山：そうです。部農会組織の活性化支援には部農会長視察研修費や部農会活動費が含まれますが、これらは組合員教育対策事業とは別建てになっています。部農会活動費として1戸当たり500円を各部農会に助成するほか、部農会が主体となって取り組む事業、たとえば水田ジャンボタニシ地域一斉防除、農道及び農業用水路整備、有害鳥獣被害対策などの活動に対して、事業費の2分の1、上限5万円の範囲内で助成とは別に支援しています。部農会の活動には行政も別途支援していますので、すべての部農会が申請しているわけではありません。

石田：行政との仕切りは難しいと思います。

三津山：おっしゃるように、そこがいちばん難しくて、部農会とJAは当然に深い関係がありますが、そうかといってJAの組織下にはないものですから、どうすべきか正直迷っています。解散したところもありますし、お隣と合併したところもあります。

昨年、今後の意向を確かめるためのアンケート調査を実施しましたが、およそ半数が現状維持、4分の1が活動の縮小、8分の1ずつが統合と解散、という結果が出ました。

部農会といっても、2人しかいないので部農会長を交代でやっていますとか、



管内の安心・安全な農産物が直売所「南部じまん市」で販売されている

町内会の副会長が部農会長をやっていますとか、が実情でして、全部が全部、純粹な昔ながらの農業者たちの組織というわけではありません。どちらかという、自治会寄りの組織になっています。活動費をお渡ししているものの、JAからこうしろ、ああしろと言うことはできません。

石田：ジレンマですね。

(取材／2024年4月25日)

「アグリロード美和」を再び訪ねて

アグリロード美和は、2023(令和5)年7月に設立25周年記念誌『JA静岡市女性部販売所 アグリロード美和のあゆみ』を刊行した。編集後記には役員の声が記載されていて、一読の価値がある。

その一部を紹介すると、代表の海野フミ子さんは「50歳でアグリロード美和を立ち上げ、25年が過ぎてしまいました。その間犠牲にしたものも多くありますが、自己名義の通帳をもって、自立した女性像を描いて全力で立ち向かってきたつもりです。大勢の仲間たちと楽しく活動できたことに感謝します」。

会計担当の藤浪政子さんは「新店舗もでき、コロナ禍の中での25周年記念誌発行に携わることになり、振り返ってみると、アグリロード美和は素晴らしい直売所だと思い、やってきて良かった。忙しい中で苦しみもありましたが、自分なりに新しい時間をもらった気持でした。これからも前進していきたい」。

まさしく、農村コミュニティ・ビジネスのリーダーとしての苦悩と自負が入り混じった感想文である。現在もそれぞれの出荷者に責任感をもたせるため法人化はしていない。地産地消給食等メニューコンテストで農林水産大臣賞を受賞した彩り豊かな「生消菜言(せいしょうなごん)弁当」は、コロナ禍で注文が激減したそうであるが、その他の弁当・オー



25周年記念誌(右)には、これまでのアグリロード美和の取り組みが紹介されている。たびたび『家の光』の取材も受けている(左)



10年以上の時を経ての再会。左から美和ブロック統括部長の大長さん、アグリロード美和代表の海野さん、取材の石田さん、会計担当の藤浪さん

ダブル類は順調に注文が入っているそうである。今回の訪問では当時お世話になった美和ブロック統括部長の大長理恵子さんにもお会いできて、本当によかったと思っている。

この記念誌には衆議院議員の上川陽子さんが「つなぎ、つながる『アグリロード美和』～農業女性の自立から、地域社会の活性化へ～」を、お祝い文として寄稿しているが、実は彼女もJA静岡市女性部の一員である。

わたし自身、女性部総会に招かれたときに、上川議員と隣り合って座った経験があるが、偉ぶるところのない人だった。聞けば無所属で立候補し苦しんでいたときに、JAが応援してくれたことに深く感謝していた。ちなみに衆院静岡1区とJA静岡市の区域はまったく一致している。

JA静岡市は鈴木脩造さんの時代から上川議員を応援しているが、その脩造さんは『家の光』創刊と同じ1925(大正14)年の生まれ。間もなく100歳、ご夫妻そろって健在で、一緒に施設に入所しているそうである。